

重田園江さんへの応答

Reply to Prof. Omoda

中野 敏男
NAKANNO Toshio

東京外国語大学名誉教授
Tokyo University of Foreign Studies, Professor Emeritus

キーワード

利己心のドグマ 関係主義 他者理解 資本主義の問題 秩序の物象化 知性主義

Keywords

Dogma of self-interest; Relationalism; Understanding of other; Problem of capitalism; Reification of orders; Intellectualism

Quadrante, No.24 (2022), pp.49–55.

目次

1. 当時のドイツにおけるアダム・スミス受容について
2. メンガー vs. シュモラー論争について
3. 「関係主義者ヴェーバー」なのか?
4. 他者理解について
5. 『プロ倫』のテーマについて
6. 禁欲テーゼと秩序の物象化について
7. 知性主義の問題について

重田さんの書評会発言の原稿化版は、ヴェーバーを扱ったいくつかの新書の中に拙著を置いてその特徴を比較評価されたもので、拙著の特徴を非常に的確に捉えて理解してくださっていて、著者として大変有り難い書評となっています。であればこそ、その位置から発して下さったご質問も、拙著の核心に関わるものと感じました。そこで以下、一つ一つについて、できる限りポイントを押さえてお答えしていきたいと思っております。わたしの応答は重田さんのご質問に直接向けられておりますから、以下については、ぜひ重田さんのご質問を参照されなが

らお読みくださればと思います。

1. 当時のドイツにおけるアダム・スミス受容について

「利己心というドグマ」を「アダム・スミスのドグマ」と名づけてこれへの批判を出発点にしたクニースの議論に対して、「実際にはスミスの思想はもっと複雑だという前提で、ドイツでそれがどう受け止められたのか知りたいという意図」からなされたご質問と理解しました。これには性質の異なった二つの面があるかなと考えています。

その第一の面は、「利己心というドグマ」について、スミスその人の思想はそれなのか、またスミスその人の思想を、当時のドイツではどのように受容していたのか、という面です。この点については、わたし自身は実のところ立ち入った研究を深めているわけではなく、また拙著においてもそれに立ち入っているわけではありません。そこで、やや逃げるようではありませんが、当面はその準備が足りていないということがあって、この点についての応答を控えさせ



ていただきたいと思います。この観点からお答えする力がまだありません。

これに対して問題のもう一つの面は、アダム・スミスその人の思想が事実としてどうだったのかはさておき、「利己心のドグマ」がそれだけで理論家たちの理論的思考の出発点に置かれて、その起点から理論構築を進めようという一群の理論家たちが潮流をなし、またそれに対抗するように、「利己心」だけではない文化や歴史に規定された諸動機に関心を持ってそこから理論構築を進めようとする一群の理論家たちが現れるという側面です。

拙著でも少し触れましたが、この当時のドイツでの論争は、「社会政策学会」が一つの拠点となったように一面では純理論的なものというより「社会政策」に対する立場の違いが先行していて、「社会主義」を主張する社会運動と、「自由貿易」を擁護するユンカー勢力を背景にした「ドイツ・マンチェスター学派」と、「社会改良」の立場に立って「講壇社会主義」とも言われた「社会政策学会」に集う人びとと、それぞれその立場が分かれていたのだと思います。このため、思想史・理論史的な系譜という観点から見ると、スミスの捉え方においても「スミスその人の思想」に実はあまり深く立ち入らないままにいた面があったかと思います。ヴェーバーに直接つながるクニースに即してみても、経済的動機の「利己心」への一元化に対抗して「ナショナルな人間」という人間のあり方を前面に押し出すのに急で、スミスはその為のステップとしてのみ扱われている感じは確かにしますね。そしてヴェーバーは、むしろこの「ナショナルな人間」という人間観を批判して、人間理解のあり方を根本的に革新する、大まかに言えばそういう展開かなと考えています。その際にヴェーバーにおいても、スミスその人の思想に深く立ち入って検討した形跡はないように思います。

2. メンガー vs. シュモラー論争について

拙著では、シュモラーから始めて解明的理解の方法創生の現場に立ち入って行きましたが、その際にメンガー（との論争）にはあまり関説することができませんでした。ただ、それでもちょっとだけ触れたように、メンガーの議論がヴェーバーに与えた影響は、「理念型」という概念に即して理解するのがもっとも的確だろうとわたしは考えています。ヴェーバーには「限界効用学説」に直接触れた短い論考もありますが、ヴェーバーの学問方法論全体に対する意義からすれば、経済理論としてのそれよりは「理念型」のこのの方が圧倒的に大きいと思うわけです。拙著でその関係について触れたのはハイデルベルク大学における1898年の「一般国民経済学講義」の要綱に即してのことですが（拙著41頁）、そこでは「数学的理想形象（Idealfigur）のアナロジー」として抽象理論を性格づけその理論的有用性を説いています。これがヴェーバー自身の「理念型」論の起点になっていると見るわけです。

もっとも、ヴェーバーの学問方法論において理念型概念がもつ重要性は言うまでもないと思いますが、それが同時代の他の論者にどれほど受け入れられたかについては、あまり確かなことが言えません。というより、「歴史学派の子」と自ら規定するヴェーバーによってそのような理論展開がなされたことは、とても大きな理論的成果をヴェーバー自身にもたらしているわけですが、それはやはりヴェーバーその人にとってもオリジナルなところで、それが他の論者によっても意識的に重用されて広く活かされているかという、そういう例は実はあまりないようにわたしは感じています。そこで、ジンメル形式社会学などとも比較したりしながら、このあたりのことはもっと調べなければならないと思っていますし、すでに調べられている方の発言を期待したいところでもあります。

3. 「関係主義者ヴェーバー」なのか？

この問題が重田さんから提起されると、わたしたちが最初に出会った頃(正確にはいつでしたっけね?)の議論の雰囲気、とりわけ廣松渉氏が存命だった頃の「駒場」の議論の雰囲気を懐かしく思い出しますね。わたし自身がその「関係主義」に立つ物象化論に大きな影響を受けたことは間違いなく、しかも、やがてその廣松学派が立っている認識論中心主義に強い違和感を覚えて、ヴェーバーにおける社会理論としての物象化論の意義を再評価すべく考えるようになった経緯があります。今回の新書は、そうした思考の成果を一部ご紹介した面があって、その点から考えるとこのご質問が出されるのも当然だったと理解できます。

そこであらためて考えてみますと、わたしが廣松学派の認識論中心主義に違和感を覚えたのには、一つにはその「実体 vs. 関係」という二項対立図式そのものへの違和感が含まれていたように思われます。「実体」であれ「関係」であれ、認識論の対象として考えていると、いずれも静態的であることを免れないと思うのですね。またそのことは「個人主義 vs. 構造主義」と言っても同じように感じます。ヴェーバーについて「方法論的個人主義」という言い方をする論者がいますが、またヴェーバー自身も限定されたコンテクストにおいては「個人主義」を表明することがありますが、ヴェーバー理解社会学の基礎的観点として考えると、そこにもやはり一つの実体化があって、採用することのできない立場だと思えます。

するとヴェーバー理解社会学が起点とするいちばんの基礎概念は何かということになりますが、それはかなりはっきりしていて、『理解社会学のカテゴリー』の言い方では「ゲマインシャフト行為 (Gemeinschaftshandeln)」、『基礎概念』の言い方では「社会的行為 (soziales Handeln)」であって、『カテゴリー』の記述で

はっきり分かるように、そこにはすでに「行為 (Handeln)」と「秩序 (Ordnung)」とのダイナミックな関係が内包されていると考えられます。そして、そのダイナミックな関係を駆動していく要素が「動機 (Motiv)」なのだという理解です。であればこそ理解社会学は、この動機の「理解」を軸に展開していく論述構成をとりうるのだし、その限りでと限定をつければこれは「行為論的概念戦略」なのだと言いうるわけです。そしてこのような概念戦略であれば、確かに「個人主義」とも「関係主義」とも異なっていると認められるように思います。

4. 他者理解について

このところ「どうしても明確に理解することができませんでした」と言われていますね。うーん、そうですか。『ロツシャーとクニース』の読解に取り組んだこの箇所は、ヴェーバーの議論としても、事柄自体としても、とても難しいところで、おそらくこれまで誰もその読解に本当には取り組んだことがないかなと思います。少なくともわたしは、納得できる解読に出会ったことがありません。しかし、今回は理解社会学の核心の紹介の本なので、わたしとしても大きなチャレンジで、広く理解可能なように精一杯かみ砕きつつその解釈をお示したつもりでした。それがまだ届かないということで、とても残念です。でも、事柄自体が難しいので、ゆっくり気長に吟味していただければと願うばかりです。

ともあれここでは、他者理解ということで、普通に考えるといちばん難題と思える「他者の痛みを理解する」ということを例にとって考えてみることにしています。「患者と医者」の例は、そこでの「理解」がロジカルな構造として説明できるかなと思ったので採用したのですが、かえって事柄を「図式化」している感じが強まって納得されにくくなってしまったかもしれません。

「患者と医者」ではなく、「子どもと親」とか、あるいは「AさんとBさん」とかの方がよかったですでしょうか。あるいは、もっと押し詰めて、初発から「自分の痛みを理解する」ということを例にとった方が、話しがずっと明確になったかもしれません。いずれにせよ、そんな対面理解のときに、実際にわたしたちはどのようにしているかをシンプルに考えたかったです。つまり、そのいずれの場合でも基本的には同じで、「痛い」と言って泣いている子どもを養育者がなだめながらその痛みの様子を探ろうとする時のように、「痛み」を体験することと、「痛み」を理解することとは違って、後者に至るには「痛み」を概念で規定していく(この子は虫歯になった奥歯を痛がっている、それは強いシクシクとした痛みだ、あーっそれだと根が膿んでいるな、とか)そんなプロセスを順次経つつ進むということです。ヴェーバーはそのことをあれこれ概念的に言っている、とまあそんな風に考えたわけですね。

拙著においては、そうしたことをジンメルの方法論議とかに絡ませながら論述したので、かえって分かりにくくなったかもしれません。しかし、ともあれそのように考えると「他者理解」は可能であり、この可能性の上に理解社会学が成立しているということ、それを感じ取ってくださればまずは有り難く思います。しかも、それを進める「解明的理解」の方法が、理解と説明との循環をなした構造で成り立っているということの説明したいと、わたしは思いました。それにより、つぎの『プロ倫』について方法論からの説明が可能になっていくと考えたわけですが、いかがでしょうか。

5. 『プロ倫』のテーマについて

この点について重田さんのお尋ねはわたしの新書を読んでくださった上でのものなので、もう少し立ち入ったお話をしなければならない

と思います。まず、ここで考えられるべき問題が『プロ倫』という作品のテーマだということを確認しておきましょう。というのは、ヴェーバーという人がそもそも資本主義の起源という問題意識を持っていたこと、しかも、彼のもっと若い頃はそれこそ学問的テーマの焦点であったと言ってもいいほどだった事実が確認できるからです。

そのことはまず、ヴェーバーの学位請求論文である『中世商事会社の歴史』(1889)に鮮明に示されています。ここでは「コンメンダ」とか「ソキエタスマリス」とか言われる海上貿易のために臨機的に作られる経営体について考察されていて、この経営体が「家計」から分離して「営利」を自己目的にした組織であり、これが中世における資本主義の重要な担い手だったと考えられています。またヴェーバーは1897年と1908年に「古代農業事情」と題する大論文を『国家学事典』の第一版と第三版のために書いていますが、これは1890年代の初頭から始めていた「古代農業史」研究の集大成で、ここでは古代における資本主義の問題が一大項目を立てて論じられるほど主題の一つとなっています。しかもこのような問題意識はそれ以降も継続して維持され、『経済と社会』に含まれる『都市の類型学』などでも、都市にさまざまな形で生まれる資本主義的組織の問題が各所で立ち入って論じられるテーマとなっています。要するに、ヴェーバーにおいて資本主義の起源という問題は、そのような形でずっと維持されている問題意識の一つではあったのです。

しかも、資本主義の起源を見つめるヴェーバーの視野には、以上の研究歴からも分かる通りごく初期から「近代」のみならず「古代」や「中世」まで入っていて、ゾンバルトの言うような「営利」目的の経済ということなら、それは近代に限られないというのがヴェーバーの一貫した見方なのでした。それは、ヴェーバーにおけ

るさまざまな資本主義の形と言ってもいいかもしれません。そこで、近代資本主義の特性を考える際には、経済システムの稼働原理と経済行為をになう担い手の行為動機とを区別して考えなければならないという、ゾンバルトの視野には入っていない問題意識がヴェーバーに生まれてくることとなります。それゆえ、『プロ倫』の問題設定を語る場合には、ヴェーバーがそのように「古代」まで含めてさまざまに追求している資本主義の起源論一般には解消されない、この著作に特別な問題設定が問われねばならないこととなります。ヴェーバーの著作歴に即して考えると、まずはこの意味で、『プロ倫』は「資本主義」の起源論ではないと言うべきであるわけです。

そこに、わたしの新書で少し触れた『プロ倫』が持ち込まれた当時の問題状況ということが加わります。つまり、「精神なき専門人、云々」なる言葉がシュモラーによりすでに持ち出されていて、この時に目前に現在する資本主義に対して、それを憂えてこの言葉を共有するような問題意識が人びとの間にすでにそれなりに広がっていたということです。ヴェーバーが『プロ倫』末尾であえてその同じ言葉に触れたのは、その言葉を共有している当時の問題状況に意識的に対して、それにヴェーバーなりの立場から、すなわち理解社会学の立場から、独自に問題提起したのが『プロ倫』という著作だということです。すなわち、考察の中では「資本主義の精神」の起源にも触れているわけですが、それはそもそも「起源」を論じようとしてのものではなく、むしろ現在する資本主義に内在する問題を解明しようという意図からのものだということです。それを「起源論」だというと、問題をずいぶん切り詰めてしまうと思います。

6. 禁欲テーゼと秩序の物象化について

「禁欲よりも貪欲の方がリアリティを持つ現

代」において「禁欲テーゼ」がどれほどの意味があるか、またそれを出発点にする「秩序の物象化」というのは確証しうるものなのか、という点ですね。これは現状認識に関わることなので、検証と意見交換が必要かと思います。

確かに、事態をちょっと遠景からみると、いまは「禁欲よりも貪欲の方がリアリティを持つ」というようにも見えますね。だけどそうだろうか。本当に各人の内発的な「貪欲」が猛威を振っているのか、「富貴への欲望」でも「名誉や地位への欲望」でも「業績への欲望」でもいいのですが、そんな「欲望」が本当にそれこそ自由に開花していると言えるのか、そうではなく、逆に、今日の「貪欲」というのは「欲望」という表象に縛られてがんじがらめになり身動きできなくなっている事態のことなのではないか。その意味でなお作動しているのは「欲望」を駆動するシステムなのではないか。だから、「新自由主義」が「自由」を標榜しているというのは、まことにアイロニカルなことなのだ。そういう風に考えてみることは、いかがでしょうか。

その先は例で考えてみましょう。わたしの友人の息子さんの話ですが、彼は学生の時にとても勤勉で、それによりとりわけ数学にとっても優秀な成績を残し、それも国際学力コンクールで表彰されて新聞などで報道されるほどの高いレベルだったので、そんな優秀な人材がどのような進路を歩むのかと楽しみにしていました。すると「叡智」に富んだ彼は、とある超巨大企業に就職し、その企業の資産運用、つまり機関投資家としてどのように資産を運用したらもっとも利益が上がるかを計算する、そのプログラムを策定する部署で働くようになったと聞きました。現代の企業は、そうやって超優秀な人材をリクルートし、そこから生まれてとびきり高度に計算しつくされた資産運用のプログラムによって投機市場を支配していて、それにより市場は、欲望に駆られた個人投資家などではとても太刀

打ちできないような、とても数理的で、ある種メカニクな世界になっているということです。これなどは、まさに「禁欲的営利」が極限的に物象化された姿をもって作動しているものと見えるし、現代は、こんな事態がさまざまな形で一般化している時代ではないのかと思えるのですが、それはいかがでしょうか。

7. 知性主義の問題について

そこで知性主義の問題、というより、おっしゃるように反知性主義がとても深刻になっていると見えるこの時代の問題ですが、このことは前項で述べた事態とぴったり重なっているところのものではないかと、わたしなどは考えています。すなわち、前項ではとびきり優秀な知性がシステムに組み込まれて物象化しメカニクに作動している姿を考えたわけですが、反知性主義の時代というのは、そのまさに裏面にあるという理解です。

「ネット時代、SNS 全盛期になって、反知性主義も非合理も、そうでないふりすらしなくなり、つまり底が抜けてしまっている」とおっしゃっていますが、この「ネット時代」というのは、実は「無知」の時代というわけではなく、むしろ「情報過多」の時代ですね。しかもそれがセグメント化してきている。ある傾向の情報にアクセスすると、その傾向の情報ばかり集中的に集まってきて、そればかりが世界のすべてであるかのように感じてしまう。ネットニュースでも、YouTube でも、Facebook でもそうですが、情報の選別と集中の仕組みがすでに組み込まれていて、人びとはすでに選別されている情報にだけ接するようになってきている。だから、ネトウヨにはネトウヨが好むような情報ばかりが届くということです。これがまた「知」の物象化の一樣態だと思いますが、今日の「反知性主義」はこのような事態とセットになっているのではないでしょうか。「知」の偏在化が進んでいるとい

うことですが、エリートの「知」と言えども「全知」ではなくセグメント化された形で物象化していて、それが反知性主義を支える一つの基盤になっていると思うのです。

そこで、おっしゃるように、こういう時代には「理性や知性よりも情念や感情の方からアプローチする思想に説得力が増している」と感じられてしまうわけですが、わたしが見逃してならないと考えるのは、それにもかかわらず物象化された「知 (savoir)」は「権力 (pouvoir)」としてこの時代に現に働いているということです。前項で触れた巨大企業の資産運用プログラムの作動を支えるエリートの「知」がその一例ですが、そうであればこのような時代には、一方で「情念や感情」のことがとても重要になっているとしても、他方ではその「知」の「権力」をコントロールすべき〈知〉の〈力〉を放棄することも決してできないと考えます。この意味で、より高次の批判的知性への志向を維持することが不可欠なのだとはわたしは思うのです。

そして、ここであらためてヴェーバーを想起して言えば、彼が「倫理的・宗教的問い」の「もうひとつの源泉」として「知性主義」の問題を提起していることが重要です(拙著260頁)。すなわち「倫理的・宗教的問い」というのは、まさに人びとの生の「情念や感情」そのものに関わり、しかもそれを自身の実際に生きる「生活態度」に接続する通路となる思考であるからです。そうであれば、この場において「知性主義」の問題を提起するヴェーバーの学問思想に学ぶことの重要性は明らかだろうと、わたしは思います。そこで、それを提示することが、わたしの新書『ヴェーバー入門』を導く重要なライトモチーフとなったのです。

* * *

以上、いずれも大切なご質問で、それに十分な回答になったかどうか心許ないのですが、いまお答えできる限りでのわたしの考えを述べてみました。ご批判いただければ幸いです。

(2021年9月11日 記)